

自我の防衛機制とその自己破壊性に関する社会学的記述

——「強迫性障害」及び「自傷行為」当事者の語りから——

大妻女子大学 共生社会文化研究所 澤田唯人

【1. 目的】

他者との関係性から成る現実には著しい不安や葛藤を抱きながらも、その合理的な解決が難しいとき、私たちの心的機制は、他者との関係性を宙づりにしたまま現実を変えるという内的な解決を図り、かつ実際にそれに応じたふるまいをとろうとする。S.フロイトが創始した精神分析学とその諸派は、この一見不可解な行為を「防衛機制」という自我による社会（規範）への再適応メカニズムとして解釈し、その構図は社会学にもいくつかの議論を通じて引き継がれている。だが、この自我の防衛ないし再適応のメカニズムとされる営みはむしろ、自己破壊や逸脱、自死さえ帰結させるアイロニカルな側面を多分に有しており、なぜこのような逆説が生じうるのかについては社会学的な検討が十分なされていない。本報告では、こうした自壊的な生存に関して（強い意味での無意識の問題とせずに）、当事者の語りからそれらの行為がもつ自己や他者への働きかけの意味と、その社会的な成り立ちについて再考する。

【2. 方法】

本報告では、「自傷行為」及び「強迫性障害」を生きる当事者の語り（インタビュー・データや手記など）に即しながら、そこでの問題の「解決」がどのような意味においてなされ、同時にどのような問題を「浮上」させていると語られているのか。そして、そのことが現代の社会的な包摂と排除をめぐり、私たちに何を問いかけているのかを検討する。

【3. 結果】

「手を洗うことで不安が流れ落ちていくように感じた」「（腕を）切ることで、誰かに私の苦しみを気遣ってもらいたかった」——。それ自体は決して珍しくはないように思われるこうした語りに示されるのは、私たちが他者との関係性をめぐるって直面する合理的・直接的には「解けない」現実を異なる意味において〈解こう〉とする傾向の存在である。J.P.サルトルは、こうした合理的ではないが、比喩的なレベルで現実を〈解こう〉とする実践を魔術的行為と呼ぶ。しかし、こうした実践がすべて自己破壊的な傾向を持つわけではない（例えば、学校的価値に反抗する生徒が、「解けない」期末テストの問題を前に、テストそのものを破り捨て教室を去ることによってこの現実を〈解く〉ことも、同様に「意味層」を比喩的にずらして拓かれる行為である）。では、このような「実践的類推」（Lahire 1998）の働きが自己の身体をも巻き込み、自己破壊的な傾向を帯びるのはいかなるときなのか。当事者の語りから示唆されたケースは、比喩的に意味層をずらしたほかの働きかけが封じられたり、そのずらした意味層の階差によって他者とのコミュニケーションがすれ違い続けてしまうような事態であった。

【4. 結論】

以上の検討から示唆されるのは、現代社会が、感情的に「未決」の問題をめぐり、比喩的な〈解決〉を図るような他者とのコミュニケーション上の回路を閉ざしつつあるのではないかという点である（例えば、かつては家族を模した擬制的な家族関係が良くも悪くもあっただろう）。ここには精神医療を含む社会関係の「フラット化」を背景に、感情的な困難の比喩的な生が宛先（行き場）を失いつつある様相が示唆される（cf. 竹中 2010）。

【文献】

Lahire, B. 1998 = 2013, 『複数の人間——行為のさまざまな原動力』法政大学出版局。

竹中 均, 2010, 「転移のコミュニケーション」『コミュニケーション社会学入門』世界思想社。